

半人前の召還師が召還魔法に失敗して 触手を呼び出してしまった結果

2014/2/19

Var. 1. 03

シナリオ…さるさる

サークル名…ケチャップ味のマヨネーズ

■登場人物

召還師（半人前）（18）

天然、野心家、明るい、元気

師匠の元で召還魔法を勉強する半人前の召還師
勉強には比較的まじめに取り組むが失敗が多い。

触手の魔物（ローパー）

全身が柔らかく複数の触手を持つ生物。
人間の女性で繁殖することができる。

■あらすじ

半人前の召還師は師匠の書庫から禁呪とされた悪魔召還の書を持ち出す。

悪魔を召還し下僕にすれば、召還師としてのランクも上がるしなにより、悪魔をこき使って仕事をさせれば楽ができると考え、誰も人が来ない洞窟の奥深くで悪魔召還の準備を進めていた。

しかし、召還魔法を間違え、触手の魔物を召還してしまう。

触手の魔物に犯され陵辱される主人公は必死に抵抗するが抵抗しても効果がないばかりか、さらに状況を悪化させてしまう。

「ふふふっ、ここなら誰も来ないから、召喚魔法を見られることはないね」

「この洞窟は街道からずいぶん離れてるし、獣が住む森からも離れているから、狩人が来ることもないんだよね」

「ふふっ、あたしってこういう秘密の場所を探すのは一人前なんだから」

「・・・」

「肝心の魔法は半人前だけだねー」

「・・・」

「自分で言うといけないねー」

「・・・」

「お師匠様は一人前になるまで召喚魔法は使うなって言うけど、兄弟弟子はまだ半人前だって言われてるのに、自分の使い魔を使役してる。あたしだけ禁止なんておかしいよ」

「あたしだって使い魔ぐらい召喚出来るんだから」

「じゃーん。この禁書さえあれば、脱・半人前！」

「・・・」

「はあ・・・今頃お師匠様は、召喚魔法の禁書がないって大騒ぎかな」

「・・・」

「でも大丈夫、ここならきつと見つからないよ。禁足の森にあるこの洞窟ならね！」

「・・・」

「暗くてちよつと肌寒いかな、ここ・・・」

「どんな理由でこの森が禁足になったのかは知らないけど、ここに来るまで何もなかったし、洞窟が暗くて肌寒いのは当たり前だね・・・」

「怖がることないよね。頑張れあたし、目指せ脱・半人前！」

「・・・」

「ふう、落ち着けあたし。まず火を熾してランタンの明かりを灯そう。召喚の書が読めないもんね」

「いつもはチャートで着火してるけど、見習いとはいえ魔法使いがチャートでカチカチってカッコ悪いよね・・・」（チャート＝火打ち石）

「・・・」

「お師匠様は炎魔法は危ないって言うけど、魔法は何度も繰り返してやってみないと上手くならないもんね」

「・・・炎魔法で薪に火を付けようとしたら、表面がちよっぴり焦げただけだったけど、ランタンに火を付けるぐらいは簡単なはず。よしー！」

「・・・」

「えーっと・・・力強き炎の精霊たちよ、我が指先に集いて力となれ」
「やった！ ランタンに火を移して・・・あちちっ！」
「・・・」
「はあ・・・ちよつと火傷しちゃった。ちゅつ、ちゅばつ・・・」
「たいした火傷じゃないし、ランタンに火が入ったし、結果オーライかな」
「・・・」
「あれ？ 天井で何かがうごめいているような・・・」
「きやつ、コウモリがいつばいいるっ！」
「いやーっ、やだやだやだっ、コウモリは苦手なのっ、あっち行っつ！」
「・・・」
「飛んでっちゃった・・・ここってコウモリの巣なのかな。って、洞窟なんだからコウモリが住んでも当たり前よね。どうして気付かなかったんだろ、うっかりさんだなー」
「・・・」
「よおーし、気分を切り替えて頑張ろう！ 魔物を手懐けるための禁断の果実（りんご）をいっぱい持ってきたし、あたしのランチも準備してきたよ」
「あとは禁書の通りに召喚魔法を使うだけっ！」
「・・・」
「うーん。どれも難易度が高いなあ・・・どの使い魔ならあたしにも扱えるのかな」
「・・・」
「わあ、このフェアリー可愛い！ これにしようかな・・・って、ネコの髭やイモリの尻尾、竜のふんなんて用意してないよ。がっかり」
「・・・」
「あつ、これなんか土とコウモリのフンと落ち葉で簡単に召喚できそうだけど・・・ゴブリン系は見た目に可愛くないな。あたしはお師匠様が使っているピクシーみたいな可愛いのがいいのに」
「・・・」
「だいたいお師匠様はずるいよ。弟子のあたしや使い魔に雑用をやらせて、一日中禁書を読んで魔術知識を高めてるんだもん。わしを超えてはじめて一人前じゃくだなんて、そんなの超えらんないよ」
「・・・」
「あつた！ これこれ、この子なら見た目も可愛いし、あたしにも召喚できそう♪」
「えつと・・・魔方阵の描き方は・・・へえーっ、わりと簡単なんだ。この通りに書けば、いよいよ脱・半人前だねっ！」
「・・・」
「これ、どういう意味の言葉なのかな？ 文字に書き順はあるのかな？」
「・・・」

「・・・わからなくてもべつにいいか、丸ごと書き写せばいいんだし」

「・・・」

「これで使い魔を手に入れたら、あたしの召喚師としてのレベルがあがるね。雑用を全部使い魔にやらせれば、あたしのお仕事が減って、魔法の勉強の時間もばっちり取れちゃうよ」

「・・・」

「それならお師匠様を超えるなんて、時間の問題だね、ふふふっ」

「魔方阵は完成つと。あとは段取り通りに儀式をして呪文詠唱。ふう、禁書って言ってもそんなに難しくないじゃない」

「ええっ、燭台が六つ必要？ どうしよう、燭台なんて持つて来てないよ」

「・・・」

「なにか代わりになるものはないかな・・・」

「・・・」

「閃いた！ コウモリのフンがいっぱい落ちてるから、それを集めてランタンの油を差して燃やせば燭台代わりになるかも。あたし、冴えてるう」

「ま、ちよつとフンに触るのは嫌だけど他に燃えそうなものはないし。この試練に打ち勝てばあたしは晴れて脱・半人前よ！ さあ頑張ろーっ！」

2.	第二章	召還失敗	※非公開
3.	第三章	帰還失敗	※非公開
4.	第四章	反撃失敗	※非公開
5.	第五章	微かな希望	※非公開
6.	最終章	絶望	※非公開

「サークル、ケチャップ味のマヨネーズ」

「この度は本作品をご購入いただきありがとうございます」

「本作品は音声作品です。イヤホンやヘッドホンなどを使用して

椅子に座ったり、ベッドに横になるなどしてリラックスした状態でお聞き下さい」

「音声に気をとられすぎて椅子やベッドから落ちたり、物にぶつかるなどして

怪我などしないようお気をつけ下さい」

「また、イヤホンやヘッドホンの端子が抜けていることに気づかず

スピーカーから大音量で本作品を再生した場合

あなたの人生に深刻な問題を発生させる恐れがありますので

くれぐれもご注意ください」

「それでは、本編をお楽しみ下さい」

「この度は体験版をダウンロードいただきありがとうございました」

「体験版をご試聴いただき、気に入っていただきましたら

製品版をご購入いただけるととてもうれしいです」

「今後ともサークル、ケチャップ味のマヨネーズをよろしくお願いいたします」